

インタビュー 芦部 彰氏に聞く

その他のタイトル	Long Interview with Dr. Akira ASHIBE
著者	芦部 彰, クリオ編集部, 西洋史学研究室院生
雑誌名	クリオ = Clio : a journal of European studies
巻	34
ページ	27-44
発行年	2020-07
URL	http://doi.org/10.15083/00079641

インタビュー 芦部 彰氏に聞く

2020年3月3日（火）

於東京大学西洋史学研究室 談話室

今回、我々は、西洋史学研究室で教鞭を執られている芦部彰氏¹にお話をうかがった。芦部氏はドイツ現代史、特に西ドイツの住宅政策をご専門とされている。

クリオではドイツ史の先生に幾度となくインタビューを行ってきた。一方で、地域を問わず、戦後史に関するものは今回が初めてとなる。インタビューでは、戦後史で博士論文を執筆した経緯、教鞭を執ったこの1年の感想、今後のドイツ現代史研究を中心に、お話をお聞きした。

なお、このインタビューは、新型コロナウイルス感染症が、社会生活に影響を及ぼし始めていた時期に行われた。この時点では研究室や図書館は開室していたが、参加者の半数がビデオ通話で出席した（東大で入構制限が強化されたのは4月以降である）。対面の出席者は距離をとって座り、窓を開けるなどの対策をとった。参加者は芦部氏の助教在任時から在籍していた院生が中心であり、終始和やかな雰囲気だった。

1. 学部から修士まで——社会学と歴史学

クリオ：まず、学部、修士の頃の研究についてお話をうかがいましょう。卒業論文や修士論文のテーマについてお聞かせいただけますか。

芦部：卒業論文のタイトルは「中央党と第一次艦隊法」でした。時代は第二帝政期の後半、ヴィルヘルム期です。文化闘争で知られているように、カトリック中央党はそれまで排除される側だったのですが、1900年頃には、与党とまではいかないものの政府と協力するようになります。そういう局面の中央党について扱いました。

修士論文はですね、「成立期におけるキリスト教民主同盟の社会経済構想」というタイトルで、1945年から1949年までのキリスト教民主同盟(CDU)の綱領を取り上げました。卒論からだいぶ時代を移したのですが、カトリックが政治の中心にいた時にどういう政策を行ったのかということに関心がありました。それで、修論では実際の政策までいなくて、その前の段階、まず党の綱領を見てみました。ちょっと補足すると、CDUは、カトリックとプロテスタントの両宗派にまたがる超宗派政党ですが、結党から20年くらいはカトリックの影響が強かったんです。修論では、CDUの綱領にある「社会的な要素」、社会政策とか福祉国家につながるものを見たいという狙いがあって、その軸と

¹ 芦部氏略歴：2015年6月に博士号（文学）取得。博士論文の題目は「1950年代ドイツ連邦共和国におけるキリスト教民主同盟（CDU）の住宅政策：カトリシズムの影響を中心に」。2016年4月から西洋史学研究室の助教、2019年4月から講師。

して、カトリックとの関係と、もうひとつ、社会的市場経済という概念に注目しました。後者はオールド自由主義の知識人によって準備されたもので、彼らはルター派なのですが、カトリックの社会哲学を参照しているという特徴があります。

村田：卒論や修論のテーマ自体はどういうきっかけで選ばれたのですか。

芦部：まずドイツ史と決めて、そこで興味があったのがドイツのカトリックでした。ですが、これが卒論のテーマとしてあり得るのか、論文として何か書けるのか、確信があったわけではなくて、みなさんと同じように、ドイツ史の重要な論点や文献が紹介されている山川の歴史大系や概説書を読んでいきました。それを頼りに文献を広げていって、『イギリス社会史派のドイツ史論』という「特有の道」論を批判した人たちの論文を集めた本²を読んだんです。当時すでに若干過去のことになり始めていたと思いますが、それでも「特有の道」論争は今よりも存在感がありました。それで、この本の中でブラックボーン(David Blackbourn)がカトリック中央党のことを扱っていて、研究対象として意味があるし、卒論のテーマとしてもあり得るんじゃないかと感じました。

村田：当時の芦部先生の状況と研究室の周りの雰囲気、実際の日本の社会状況と研究テーマの関連というのはどうだったのでしょうか。

芦部：社会の状況としては、「福祉国家の解体」とか「小さな政府」、少し時代が前後しているかもしれませんが、「新自由主義」ということがさかんに言われる時代だったと思います。その中で、福祉国家解体に対する疑問がありました。そういう流れがどんどん強まることに対しておかしいんじゃないかと。研究テーマとの関わりでは、先ほど言った、修論で社会的な要素を見たいというところですね。そこで注目したオールド自由主義は、世界恐慌後に出てきた自由放任を否定する「新自由主義」です。福祉国家についても独自の構想があって、同じ「新自由主義」と言っても、市場に全部任せてしまえっというのとは違います。要するに、福祉国家と結びつく「(新)自由主義」という点で面白いなと思いました³。

それから、福祉国家批判では、財政の問題とは別に、私的な領域に国がどんどん介入していくことも問題になっていたと思いますが、その中で、人間の自律性を奪うのではなくて、しかし社会的に援助するような原理や理念ってないのだろうかという疑問があって、この点でカトリックへの関心を新たにすることもありました。先ほど言ったオールド自由主義へのカトリックの影響も、この点なんです。こういう経緯で、カトリックを単純な保守反動として捉えるような見方だと、何か大事なものを見落としてしまいうんじゃないかと思いましたし、カトリックと社会政策に関心を持つようにもなりました。

山口：芦部先生は社会学もしくは隣接する研究分野にも関心をお持ちだと思います。それらの分野での成果を、歴史学の枠で、歴史学研究の手法としてどう使っていくべきなのか、ご意見をおうかがいしたいです。

² D. ブラックボーン、G. イリー、R.J. エヴァンズ（望田幸男ほか訳）『イギリス社会史派のドイツ史論』晃洋書房、1992年。

³ 芦部彰「オールド自由主義と社会国家」『歴史学研究』828号、2007年6月、37-45頁。

芦部：そうですね。私は初めから西洋史学に進学したわけではなくて、まず社会学に進学したんです、進学振り分けで。(学部3年の)1年だけ社会学にいて、転学科で西洋史に移ってきました。

隣接分野の概念や理論というと、エスピン＝アンデルセン(Gøsta Esping-Andersen)の福祉国家の類型論⁴は、面白いなと思いました。ただ、最初から意識して使おうということではなかったと思います。質問をいただいて改めて考えると、こういうテーマがありうると気付かせてくれる、あるいは、別々に考えていたけれど関連があるらしいといった、発見するところがあるのではないのでしょうか。もうひとつは、普遍化するというと大げさかもしれませんが、実証研究をやっている、それがどういう広がりがあるのかを考える手がかりになるようにも思います。どういう比較の可能性があるのか、どういう問題と接続するのかということですね。

ただ、これは姫岡とし子先生⁵の戒めでもありますが、実際に論文を書く時には気をつけないといけないこともあるように思います。特に、流行の概念は論文に入れたくなりますが、使うかどうかの基準は、それで理解が深まるかどうかということ、なんとなく見栄えが良くなるからというのは違いますよね。姫岡先生に博士論文の原稿をお見せした時に、「ごまかさない」ということを言われました。概念やレトリックでなんとなくわかったような文章を書いてしまう、自分もわかった気になってしまう。これは恐ろしいことで、若い時に身につけてしまうと、後になって直そうとしても難しいと。そう言われて、ぞっとしたことがあります。必要ならば使うわけですが、本当に必要なのか、なくても書けるのか、その点を意識して論文を書くことを若い時にやっておかないと、ということをおっしゃっていました。

これは別に(概念を)使っちゃいけないというわけではなくて、いいところもあれば気をつけないといけないところもありますよ、ということですね。

クリオ：社会学を経て西洋史学へということですが、学部や院で「遠回り」することや研究テーマを変えることについて、今も学生の中には思い悩んでいる人もいますかと思えます。そういったことについて、どのようにお考えですか。

芦部：そうですね。その時「遠回り」した時間ばかり気にするより、修士論文や博士論文にかかる年数も含めて、トータルで考えるのもひとつじゃないかと思えます。それにしても、私は時間がかかっているのですが、留学のタイミングや、史料が見つかるかどうかなど、自分ではどうにもできない運とか偶然もあります。なので、あんまり考えすぎないことも大事ではないかなと思います。私はだいぶ遠回りしちゃったんで、1年や2年なんだと学生さんに言いそうになってしまって、ただで置かれた状況はそれぞれ違うから、それはそれで無責任ですよ。

⁴ G. エスピン＝アンデルセン(岡沢憲英、宮本太郎監訳)『福祉資本主義の三つの世界：比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房、2001年[原著：1990]。

⁵ 姫岡とし子先生は、2009年4月から2016年3月まで西洋史学研究室の教授。芦部氏の留学からの帰国後、博士論文執筆時の指導教員であった。こちらも参照。「桜井万里子・姫岡とし子対談インタビュー：「ジェンダー史学を語る」『クリオ』23号、2009年、44-64頁；「姫岡とし子教授 ロング・インタビュー」『クリオ』29号、2015年、1-28頁。

自分自身のことを少しお話すると、どうやって社会学から西洋史に来たかという、いきなり西洋史の先生に会いに行きました。史学概論を担当されていた近藤和彦先生⁶です。当時はメールでのアPOINTはあったろうと思いますが、それほど一般的でなくて、先生の研究室に直接行きました。実は何回か行って、ドアの前でノックしかけてやっばり今日はやめとこう、みたいな感じでやめて。(一同笑う) 4、5 回目に思い切ってトンとノックしちゃったんです。ノックしちゃった、という言い方はおかしいですけど、先生がちょっと驚いて「はーい」って出ていらして、お話ししたいことがあります。それで話を聞いてくださった。そういう感じだったんです。

西洋史に移って、先生方、先輩や同期に受け入れてもらえたのは、とても恵まれたことでした。ただ、遠回りした場合、ちょっと年齢差が生まれますよね。学部から修士、博士とあがっていくわけですが、僕は同期より年齢が上なんです、転学科して西洋史に来た経緯もあって。日本だと、やっぱり年上年下を気にするでしょ。今振り返ると自意識過剰だと思うんですけど、実際、気にした事もありました。今も、当事者はけっこう気にするかもしれませんね。でも、なんとなく自分で接し方を見つけていくというか、それもまた意味のあることなのだろうと思っています。もうちょっと言うと…。ちょっと長いですかね。

クリオ：いえ。お願いします。

芦部：私の場合、やりたいと思って西洋史に来て大学院に進んで、卒論から修論で時代を移したのも、移しなさいって言われたのではなくて自分で移したわけです。自分でも、こんなんで大丈夫だろうかと思ったことはありますし、他の人の目が気になったこともあります。でも自分で決めたわけですし、そこはもう、やるしかないというか、そういうことなんだと思います。悩む時もありますが、(変化や遠回りに)自分で踏み出してみるというのは、やはり大きな意味があるだろうと思っています。

新米教師ですけれども、論文のテーマや院進学で迷う人は本当に多いんだと、改めて認識させられました。ですが、例えば今年(2019年度)の卒論でも、テーマが多様で、自由にやっている印象を持ちました。実際、思い入れのあるテーマじゃなかったら、やりきれるものではないとも思うんです。ただこれは、例えばドイツ史でいえば、かつての「特有の道」論争みたいな「これこそがドイツ史」という求心力のあるテーマがない、ということなのかもしれません。

2. 「まず Überblick が必要です」——ボン留学について

村田：修論を初期 CDU の社会的なもの(社会政策とか福祉国家につながるもの)というテーマで書かれたということですが、そこから博士論文にはどう展開していくのでしょ

⁶ 近藤和彦先生は、1988年4月から2012年3月まで西洋史学研究室の教授(1988年から1994年まで助教授、1994年から教授)。木村靖二先生の退官後、2004年から2011年まで芦部氏の指導教員であった。こちらも参照。「インタビュー 近藤和彦氏に聞く」『クリオ』4号、1990年、80-90頁；「近藤和彦教授 ロング・インタビュー」『クリオ』25号、2011年、1-48頁。

う。まず留学前の時点で、何か研究テーマを提出したと思うのですが、それはどんな内容でしたか。

芦部：そうですね。修論では1945年から1949年まで、占領期のCDUの綱領を扱いました。今度は、西ドイツが建国された後、実際の社会政策がどういう理念に支えられていたのか、カトリックの影響やオールド自由主義との関係を検討しようと考えました。それで、どの政策を見るかということが問題でした。最終的に住宅政策になりましたが、社会政策というと、ドイツの場合、まず社会保険制度、それから労働時間を短縮する、賃金を上げる、そういう労働者政策の存在感が大きいんです。(かばんを探す)

クリオ：何かお持ちいただけたのですか。

芦部：(本を数冊取り出しながら) どのように勉強していたかということですよ。カウフマン(Franz-Xaver Kaufmann)という社会政策学者がいて、歴史学者ではなく、11巻の社会政策史⁷の理論編⁸で出てくる人ですが、その人の社会政策の思想史⁹を読んだりしました。

その頃はですね、木村靖二先生¹⁰が退官されて、ドイツ史の院生はイギリス史の近藤先生に指導教員としてお世話になっていました。ただ、ゼミの先輩方が木村先生を囲んで読書会を開いてくださって、私は隅で話を聞いているだけでしたが、とても勉強になりました。それから、先輩の小野寺拓也さんが留学から帰って来られて、ドイツ史の院生で読書会もやりました。

さっきのカウフマンの本は、院生の読書会で報告したんです。ただ、どうやってカトリックの影響を考察するかという点では困ってしまって、それまで注目されてきた政策では難しそうなので、他の政策に目を向けるようになりました。その時に、修論の段階で占領期の綱領の背景として戦間期、第二帝政期のこともちょっと見ていたのですが、カトリック教徒大会の演説などで、住宅に関連することがけっこう言及されていて、可能性があるかもしれないと思いました。それで、住宅政策に関してどういう研究があるのか見ていくと、ギュンター・シュルツ(Günther Schulz)というボン大学の先生が、住宅政策を含むアデナウアー時代の社会政策について論文を書いていて、その中でSozialpolitikからGesellschaftspolitikへの発展ということを書いていたんですね¹¹。ここでのSozialpolitikは、社会の下の方の階層に向けて行う政策といった意味が強く、Gesellschaftspolitikはもっと包括的で社会全体の構造を作り変える政策といったニュアンスです。後者は、基本的にもう少し後の時期で強まるのだけでも、アデナウアー期にも見られる、その例として住宅政策が挙がっていました。こういった文献を見る中で、その時点でどこまで見通しが立っていたかわかりませんが、住宅という生活の場を形作

⁷ Bundesministerium für Arbeit und Sozialordnung und Bundesarchiv (Hrsg.), Geschichte der Sozialpolitik in Deutschland seit 1945, 11 Bde., Baden-Baden 2001-2008.

⁸ 上記の第一巻、Bd. 1: Grundlagen der Sozialpolitik (2001).

⁹ Franz-Xaver Kaufmann, Sozialpolitisches Denken. Die deutsche Tradition, Frankfurt am Main 2003.

¹⁰ 木村靖二先生は1989年4月から2004年3月まで西洋史学研究室の教授(1989年から1995年まで助教授、1995年から教授)。2000年から2004年まで芦部氏の指導教員であった。こちらも参照。「インタビュー 木村靖二氏に聞く」『クリオ』5号、1991年、24-34頁。

¹¹ 例えば、Günther Schulz, Konrad Adenauers gesellschaftspolitische Vorstellungen, in: Hans Pohl (Hrsg.), Adenauers Verhältnis zur Wirtschaft und Gesellschaft, Bonn 1992, S. 154-181.

る政策とカトリックの理念との関わり合いを見ようということになりました。

クリオ：実際に留学先では、どのように研究をされていたのでしょうか。

芦部：2007年の秋からボン大学のシュルツ先生のところに留学しました。ひとつ大きなこととして、シュルツ先生ですね、副学部長だったんですが、私が行った後に学部長になっちゃったんです。それで、とてもお忙しい。大学や先生による違いはあっても、博士課程の院生、ドクトラントのゼミって、月1回とか隔週というのが多いようですが、シュルツ先生の場合は、年に1回になりました。これはさすがに異例だと。(一同笑う)先生のドクトラントが集まって、1日、朝から夕方まで、1人20、30分ですかね、だいたいどういうことをやっているかを報告する。これでは足りないですよ。

それで、僕は *Sprechstunde* というものに通いました。これは日本のオフィスアワーにあたるものです。その時間帯は先生が研究室にいて、研究のことなど相談できる時間が設けられています。月に1回か、進展具合にもよりますが *Sprechstunde* に通って先生とお話します。他にもその時間に来ている人がいますが、僕は語学的なこともあって時間がかかるから、先にどうぞと(言って)。人が待っていると落ち着かないので、最後に回してもらって。準備して行って、メモを見ながら、ここまでこういうことしてきました、次にこういうことやろうと考えていますと言う。そうすると先生がうーんと考えてアドバイスをくれる、そんな感じでした。

私のテーマはカトリックという、宗教の要素が入っています。シュルツ先生は1950年代の住宅政策に関して教授資格論文(*Habilitation*)¹²を書いたのですが、博士論文は、ケルンの経済史です。社会政策のことも書いていらっしやって、もちろん政党間の対立や理念も扱いますが、それが一番の関心ではなかった。そこに日本から、要するにキリスト教の国ではないところからやってきた学生が、カトリックの理念の影響と言っているわけです。ドイツ語も達者じゃない。当然ですが先生はちょっと心配されていましたね。テーマ自体、否定はされませんでしたけれども、先生自身の分野からも、あまり心惹かれない様子ではありました。率直に言ったらそうです。それでも *Sprechstunde* に行くと、指導してくれました。たとえば、文献を教えてくれる。アントン・ラウシャー(*Anton Rauscher*)という人が、カトリックの社会哲学について書いているとか、そういう形で、きっかけを与えてもらいました。それから、こういうシンポジウムがあるから行ってみなさいとか。

村田：他に、シュルツ先生とのやりとりや現地の院生との接点はあったのですか。

芦部：ボンに行った最初は、先生も勝手がわからないだろうとだいぶ気にしてくださって、最初の数回の面談には、アシスタントの学生が一人同席して、その人に図書室の利用の仕方などを教えてもらいました。

今でも覚えているんですが、初回か、2度目の面談の時に「文書館に行きたい」とシュルツ先生に言ったんです。そうしたら先生は、「文書館に行ってもたくさん史料がある

¹² Günther Schulz, *Wiederaufbau in Deutschland. Die Wohnungsbaupolitik in den Westzonen und der Bundesrepublik Deutschland von 1945 bis 1957*, Düsseldorf 1994.

んだよ」と、「まず *Überblick* [概観] が必要です」とおっしゃったんです。具体的には何のことだろうと思って、研究動向のことかなとか考えていたら、僕の反応がかんばしくないのを感じてか、「事典の記事を読みなさい」と言われました。助手さんとコピーを取りに行き、その項目とそこに挙がっている参考文献を読むように。それで、何を讀むんだろうと思いつながらコピーしに行ったら、既に日本で読んだことがあった文献¹³でした。(一同笑う) これはもう読んだので、他のものを紹介してくださいって言えば良かったのかもしれないんですけども、だけども、ここからなのかなとも思って、それで、そのまま家に持って帰りました。

次の面談で驚いたのが、今度は先生から文書館には行きましたかと聞かれたんです。

(先生は) 前に言ったことを忘れていただけかもしれないし、あるいは、1 か月もあれば読み終わるだろうから、そうしたら自分で考えていこうと思われたのかもしれない。だけど、僕は許可をもらわないと行っちゃいけないと思っていたので、他の文献を讀んだりしていました。それで、アデナウアー財団の文書館に行きたいので、指導教員欄に名前を書いていいですかと聞いて、先生は「もちろん」と言ってくださって、やっと史料調査が始まりました。

他の学生とは、ゼミが定期的には開かれていないので、頻りに会うことはなかったです。ただ、学科の図書室で会うことはありましたし、小さい街なので思いがけず出くわすことも結構ありました。少し話がそれてしまっていますが、私の場合、自分用のデスクは学科にありませんでした。他の国の話を聞くと、もらえる場合もあるみたいですね。

クリオ：内川さんいかがでしたか。デスクなどはありましたか。

内川：僕はエディンバラ大学に *visiting student* として短期留学したのですが、正規課程の院生には各々デスクとロッカーが割り当てられていました。僕たちも申請すれば、数に限りはあるのですが、*visiting student* 用のデスクを利用することができました。

芦部：なるほど。そもそも東大にいと自分のデスクがあるという発想がないですね。今もみなさん持っていないでしょう。こういうものなのかなと思っていました。(学生も頷く)

後になってそういう話を聞いて、ちょっと驚きました。僕が勉強していたのは、図書室か自宅のアパートです。歴史学科の図書室や法学部の図書室にも行きましたが、ふだん勉強する場所が一番大きい総合図書館(*Universitäts- und Landesbibliothek*)でした。

村田：大学(*Universität*)と州(*Land*)が一緒だったんですか。

芦部：一緒でした。アパートはですね、最初は、街はずれの学生寮にいたんですけども、途中で中心街に近いところに引っ越して、その一番大きな図書館から歩いて4、5分でした。ライン川のすぐ近くです。

あと、学生との交流に関していうと、夏にイベントがありました。助手さんや学科の仕事をしている学生さん全員、先生のご自宅に呼ばれて一緒に食事をする、庭でビールを飲むというのがあって、私も邪魔しました。

¹³ 事典は、Winfried Becker / Günter Buchstab / Anselm Doering-Manteuffel / Rudolf Morsey (Hrsg.), *Lexikon der Christlichen Demokratie in Deutschland*, Paderborn 2002 ; 例えばシュルツ先生が書いた項目は、“Wohnungsbaupolitik” (S. 694).

ただ研究では、Sprechstunde で先生からアドバイスをもらったのが大半と言っていると思います。史料に関しても、そこでご教示いただきました。シュルツ先生と、その他に何人か 1950 年代の住宅政策や住宅改革運動について書いている人がいます。その人たちの研究がベースで、そこで使われている史料ですね、まずはそれを見ている、あるいはこう書かれているけど、自分が読んでみたらどうなんだろうってところから始めました。

クリオ：文書館の使い方などはどなたかにお聞きになったんですか。

芦部：使い方ですね。CDU の史料を持っているアデナウアー財団の文書館がメインで、ここはシュルツ先生が助手として働いていたところです。それで、これはたしか、最初先生が伝えておくということでした。

クリオ：何か伝えておいてくださったのですか。

芦部：こういう学生が行きますと伝えておいてくださいました。実際の利用に関しては、文書館の方が教えてくれました。書類のここに出してもらいたい史料番号を書くとか、フィンドブッフ(Findbuch)というカタログがあってこれを見るときか。留学前に、別の文書館ですが史料調査に行ったことはあったんですが、本格的な調査はこの時が初めてでした。

文書館によってルールが違う場合もありますが、一度じっくり説明してもらおうと、基本的な事柄をおさえることができるので助かりました。このアデナウアー財団の文書館と、ボンから鉄道で1時間ちょっと南にいったコブレンツの連邦文書館、ここは連邦省庁の史料があります。それから、当時首都だったボンや近隣のケルンに色々と団体の本部がありましたが、その史料はノルトライン・ヴェストファーレン州というボンを含む州の文書館に収められていて、今度はボンから1時間ちょっと北に行ったデュッセルドルフに行きました。この三か所で調査を始めて、その後 CDU と対立した側ですね、社会民主党(SPD)の史料も見られるようになって、ボンにあるエーベルト財団の文書館に行きました。

クリオ：それは必要に応じてどんどん広がっていったということですか。

芦部：そうですね。だんだん史料調査が進んでいって、さらに調べることが出てきたり、すでに調べたことの補強をしたり、ということです。今挙げた以外では、ベルリンの議会文書館とケルン大司教座の文書館、バイエルンとベルリンの州立文書館に行きました。基本は、さきほどの四か所で、ボンから南北それぞれ1時間ちょっとの範囲を行ったり来たりしていました¹⁴。

内川：現地の人々との交流に関して、日常的にドイツ語でコミュニケーションをとる機会はありましたか。またイベントへの参加など、何かされていたことがあれば、お話しただけると嬉しいです。

芦部：ドイツの大学では、ドイツ人学生と外国人学生がドイツ語と外国語を教え合う、例えばですが、半分ずつ時間を決めて相手の言語で話をして練習するタンデムというも

¹⁴ こちらも参照。「欧州文書館事情」『クリオ』24号、2010年、83-132頁。芦部氏の執筆箇所は99-102頁；なお、デュッセルドルフの州立文書館は、2014年にデュースブルクに移転した。

のがありました。それとは別に、情報科学(Informatik)や法学の学生と仲良くなって、僕はフランス語を喋れないんですが、彼らはフランス語ができるのでパリに行く時についていたりしました。

文書館にこもるだけでなく、その土地でどういう生活をしているのか、「人間」を見てくることが大切だということは、留学前に、木村先生や近藤先生からも言われていました。

内川：ありがとうございます。留学していた時のことを思い出しました。

3. 帰国後の悪戦苦闘——博士論文執筆に向けて

村田：研究の話に戻ると、シュルツ先生のもとでテーマはどのように変わっていったのですか。

芦部：最終的には、オールド自由主義が背景に退いて、カトリックの理念が前面に出てくることとなります。カトリックの政治家が主導したというレベルだけでなく、もうちょっと踏み込んで、人間像や社会像、そういったレベルでカトリックの影響を見ようということですが、ただ、留学中はまだオールド自由主義についても調べていて、住宅政策に即して、カトリックとオールド自由主義、この二つの関わりを具体的に示せないかと考えていました。

実際にオールドの知識人であるリュストウ(Alexander Rüstow)の史料にカトリックへの言及があったり、カトリックの知識人であるネル＝ブローニング(Oswald von Nell-Breuning)の同時代の刊行物を見ると、オールドへの言及があったりして、これはもうちょっと頑張れば両者のリンクを具体的に示せるのではないかと思いましたが、結局、住宅政策に即しては史料を発見できませんでした。

留学を通じて、両者の関連をはっきり示すのは難しいことがわかって、カトリックに重心を置くようになるわけですが、実は日本に帰国した時点では、カトリックの理念を中心に据えるということは、そこまで明確ではありませんでした。博論や、その前の論文¹⁵を書く段階でも、かなり曖昧なままでしたね。

クリオ：(論文の現物を示しながら、オンライン参加者に向かって)こちらです。

芦部：この論文では、オールドは消えていると思います。

村田：それはやはり査読の修正などの指摘で。

芦部：そうなんです。日本に帰ってきたのが2010年12月で、2011年の5月から6月にかけて、木村先生を囲んでの読書会や、近藤先生と姫岡先生の合同ゼミで、博論構想を報告させてもらいました。今レジユメを見返しても、問題設定が明確ではないですね。その年の史学会大会でも報告した後に、投稿論文を書き始めて、この頃からカトリックの理念を見ることに絞り始めたのですが、2012年まるまる1年苦戦しました。掲載が決まったのは2013年の後半だったと思いますが、査読の指摘をうけて、修正して再投稿す

¹⁵ 芦部彰「一九五〇年代ドイツ連邦共和国におけるキリスト教民主同盟(CDU)の住宅政策とカトリシズム」『史学雑誌』123編4号、2014年4月、59-83頁。

るのにかなり時間がかかりました。問いが曖昧だったことが、ここでの苦戦につながったように思います。それから、留学中には、住宅改革運動についても調べていました。色々な潮流があるのですが、それらが CDU の政策とどう関連するのか、団体の議事録など集めた史料をどう活かすかというのも課題でした。

ですが、悪戦苦闘する中で、何を明らかにしたいのか、軸がだんだんと定まってきました。それで、投稿論文の進展を踏まえてだと思のですが、2014年の2月頃ですかね、姫岡先生に、半年後の夏休み明けに博士論文の完成原稿を持ってきてくださいと言われました。かなり驚いたのですが、考えてみたら2010年の12月に帰ってきて、3年以上経っているんです。それまでにボツにしたり書き換えたりした原稿があったので、それを基に書いていって、結果的にどうにか夏休み明けに持って行くことができました。

博士論文を本¹⁶にする時は、木村先生にご助言をいただきました。例えば、序論で、この本に何が書いてあるのか一生懸命書いているけど、何が書いてないのかについては書かれてない。そういうのはダメだと。あるいは、ちょっと整理しすぎとか、カトリックの中で対立が残った点も、もっと明確に示したらどうかといったことです。

今思うと、投稿論文で悪戦苦闘して、そこで2年くらいかかって、時間がかかりすぎだと思んですが、その後どうにか博士論文をまとめることができたのは、査読の先生に色々と言っていたいただいたおかげだと思っています。

4. 電子化と現代史の史料状況

クリオ：史料の話に移りたいと思います。最近は、修士課程で史料調査に行く学生も増えていきますよね。

村田：海外に行くのが手軽になり、電子化史料も増えていきます。つまり、一次史料に触れる機会が増えているということですよね。一方で、Überblick じゃないですけど、それなりの先行研究の整理と史料を読む訓練が必要かと思うんです。特に電子化史料に関しては、検索して誰でも読めちゃう、せっかくだし卒論で使おうなどと、考えないで史料を読むと問題も生じるのではないのでしょうか。

芦部：そうですね。全体像や研究史に関して理解が不十分なまま、自分が気づいた範囲でこういうことが言えると書きちゃうと、危ないですよ。 (史料を) 見ることができると、見なくなるだろうし、試しに見てみるのも意味があるのだらうと思います。ですが、遠回りのようですけど、『卒論の書き方』¹⁷にも書いてあるように、先行研究をよく読んで、色々なことを見て初めて史料というのが順番です。

それに、そもそもの基本として、史料がなぜ残っているのか、なぜ残っていないのかということは、歴史学の重要な問題です。それと同じように考えないといけない問題が電子化についてもあるように思います。要するに、なぜこれは電子化されて、これは電

¹⁶ 芦部彰『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策：1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』山川出版社、2016年。

¹⁷ 西洋史学研究室で発行しているパンフレット。註のつけ方などが記載されており、学部生が卒業論文を執筆する時に参照することが多い。

子化されていないのか。どういう選択があつて電子化されているのか。使えるから使いましたというのは、本当はまずいですよね。

そういう大事な問題がありますが、電子化史料のキーワード検索って便利だなと私も思います。大規模なデータベースは使ったことがなくて、オンラインで見られる議事録や新聞くらいしか利用したことはありませんが。ただ、そもそも何をキーワードにするのかという問題がありますよね。私の場合だと、「家」や「住宅」を意味する言葉の使い分けにこだわるカトリックが出てきます。Heim と Wohnung という言葉ですが、Heim は、ある世界観—ここではカトリックの世界観ですが—に満たされた空間、Wohnung は、そうではないただの入れ物、あるいは容器という分け方です。それが分かった上で、Heim と Wohnung でキーワード検索して、ここでもこういう使われ方がされているとわかると、面白いですよね。ただ、色々史料を読んだ結果、Heim と Wohnung の使い分けに注目するに至ったわけなので、こういう便利なツールを活かすためにも、地道な作業は外せないのかなと思います。

長島：ドイツ現代史を研究する上で、史料のアクセスはどういった状況にあるのか、お聞きしたいです。

クリオ：岡本くんはどう思いますか。

岡本：時代が新しい分、他と比べたら見やすいのかもしれないです。個人的には、新聞史料をちょっと見ることはありますけど、PDF に OCR がかかっていなかったりして。

(一同笑う) そういう点で使いにくいなと思うことはあります。

芦部：ドイツはデジタル化に出遅れていますよね。ただ、紙媒体の刊行史料集は充実していると思います。文書館史料も、原則として 30 年経過したら公開されるというルールが守られています。30 年ということで、今、ドイツ再統一の過程が研究対象になっています。史料が出揃うには、もうちょっと待たないといけないかもしれませんが。

村田：他の時代と比べると、現代史には、著作権の問題があると思います。たとえば、1960 年代に出された文献は、現代史からしたら一次史料です。一次史料はちょっと前の時代の人にとってはもう著作権が切れていますけど、(現代史は) 一次史料に使うような当時の人が書いた文献も図書館で取り寄せたりしなきゃいけないと、そういうことはあるんじゃないですか。

芦部：そうですね。留学中の史料調査では、文書館史料も見ましたが、同時代文献もかなり集めました。1950 年代に刊行された本を一次史料として使うわけですが、ボン大学の図書館で取り寄せて閲覧したり複写したりすることは多かったです。

岡本：時代が新しいと、研究対象が存命ということもありますよね。

芦部：私自身は、インタビューはやっていませんが、シュルツ先生の本は 1990 年代の出版で、研究はさらにその数年前ということになります。実際に 1950 年代に活動していた政治家にインタビューしていますね。

5. 基本をどう伝えるか——教員として

岡本：授業自体は他の大学でも持っていたと思うんですが、ここ〔本郷の西洋史学研究室〕で1年教鞭を執られて、何か思うことがありますか。

芦部：印象的だったのは、ベンヤミン・ツィーマン（Benjamin Ziemann：シェフィールド大学教授）先生が院ゼミに来てくださった時のことです。7月の初めですか。そこで、みんな英語かドイツ語で研究計画を発表することになりました。駒場や他大学からも学生さんが来てくれましたが、全体としてほとんど修士1年生で、大学院に進んで間もない時だったのに、みなさんやりきりましたよね。自分が修士1年だった時にできただろうかという、ちょっと怪しいなど。

教員として反省しないといけない点は、たくさんあるのですが、ひとつは、待たないといけない時もあるということです。僕はどうしても待てずに、まだ考えている最中かもしれないのに声をかけちゃうとか、ちょっと口を出しすぎたかなと思うところがあります。

その一方で、むしろ、もうちょっと口を出すべきだったかもしれないということもあります。自分が大学院に入った頃を振り返ると、ドイツ史の先輩がたくさんいて、見よう見まねで身につけることも多かったように思うんです。今はさっき言ったように、院生の構成として学年が下の方に固まっています。そう考えると、いくつか基本となるもので、教員が示さなきゃいけなかったこともあったかもしれません。

つまり、バランスが大事だと思うのですが、これも振り返ってみると、先生方は、たしかに先回りして教えることはされませんでした。基本となることはきちりおっしゃっていたように思います。例えば木村先生のゼミを考えると、本を読むにしても読み始める前にやるのがたくさんあると強調されていました。著者を調べるのはもちろん、目次をよく見る、書評を見るといったことです。他にも、文献を読んでいてひっかかった箇所があったら、著者はなぜそういう書き方をしたのか考える、あるいは、何が書かれているかだけでなく、何が書かれていないかを考える。これは、ゼミの議論についても、どういう議論ができれば良い議論なのかということにつながりますよね。こういう基本をどう伝えたらいいのかと、今も考え中です。

クリオ：学生の日常的な面については、どのように思われていますか。

芦部：はじめのほうに「遠回り」という話が出ましたが、そういう人に共感を覚えるところはあります。あと、学生談話室に行くと勉強している学生がいて、地味な作業をこつこつと続けているのを見かけたりします。やっぱり愚直であるというのは美德だと思うんですよね。

それから、色々なところに出ていくフットワークの良さを感じます。もっとも、近道するノウハウだけ集めてくるという方向で発揮されちゃうと、ちょっとどうかなとも思います。最短距離を行きたいのは誰しも当たり前ですが、歴史学に関わることって、それなりに時間がかかることが多いですし、試行錯誤して初めてわかることも大事だと思います。折角の良さが仇になってしまったら残念ですよ。

八谷：私自身新米の教員であり、これから大学で教員として仕事をしていく上で、若手

の教員として芦部先生がどのように心がけていらっしゃるのかを教えてくださいなと思います。ひとつは、学生との距離をどうとるかということなんですが、何かお考えがありますか。

芦部：はい、ありがとうございます。若手の教員としては、学生が気軽に声をかけられる存在でありたいと思っています。同時に、ゼミの運営などがそうですが、教員としてふるまうとなると、どうしても、どこかで線を引かないといけないところがあって、学生との距離感は今も試行錯誤中です。

八谷：あと、もうちょっと長期的なスパンで、これから教員として長く過ごされる上で、こういう先生になりたいなというようなものがあればそれも教えてくださいな。

芦部：正直に言って、これというものはまだまだ固まっていません。最近、自分が教わった先生は何ておっしゃっていたかなと、本当によく考えます。最初に触れた姫岡先生の戒めがまさにそうですが、そういう今も覚えている言葉を頼りに模索しているところです。その中でも、さっきも言った基本的なことが大事だと思うんです。特に、ドイツ史は若い院生が多いですし、自分のことを振り返っても、学部、大学院とドイツ史の研究者を目指す、そういう道を進んでいくうえで、木村先生に教えていただいたことはとても大きいんです。ですから、そこで教わったことを、自分なりにどうにか伝えられれば、という思いがあります。

それから、私はずっと近藤先生にもお世話になって、八谷さんもご存知だと思いますが、「大きな輪郭、意味ある細部」とよくおっしゃいますよね。ゼミをやっていて、(学生の中には)細部にだけ飛びついちゃう傾向がどうもあるような気がしていて、輪郭をもうちょっと考えましょう、それは細部をないがしろにするわけではなくて、大きな輪郭を意識することで細部の持っている意味をよく考えることにもなるし、細部を考えることで輪郭を見直すことにもなるし、そういうことも伝えられたらいいなと思います。

村田：ひとついいですか。今博士課程の学生は、修士や学部生にとって先輩にあたりませんが、先輩は後輩にどう振舞ったらいいでしょうか。

芦部：特別に気負う必要はないのではないのでしょうか。後輩から聞かれたらそれに答えてあげる、それと、傍で見ていて困っているなという時に、手を差し伸べられたらいいと思います。これは、それぞれの関係もありますから。

後輩は後輩で、取捨選択しながら学んでいくと思うんです。「あれは良いと思うけど自分には向かない」ってやらないとか。アドバイスしたけど、(後輩が) そうしなかった場合は、自分なりに考えて自分には向いてないと思ったのだろう、くらいでいいんじゃないですかね。教えてやったのになんだとか、そういうことになっちゃうのは絶対によくないと思うんです。

6. ドイツ現代史の今後——これからの研究と歴史学

クリオ：今後のテーマについてお聞きしたいと思います。博士論文後の、次の研究テーマは何を考えていらっしゃいますか。

芦部：これまでの延長上で考えているものと、今までとは異なるところで取り組んでみようというものがあります。

これまでの研究を振り返ると、「社会的」という規範はひとつではなくて、色々な理念に支えられた「社会的」「社会的なもの」があると思います。階級や社会主義がイメージされるかもしれませんが、ドイツ史だと民族やフェルクシッシュ〔völkisch：民族至上主義的〕なもの結びついた「社会的」もあります。それらとはまた異なる理念として、自分が見てきた社会カトリシズムもあると考えています。この流れへの理解を今後深めたいと思っています。今まで扱ってきたカトリックの住宅政策には、家族政策という性格もありました。それで今は、同時代の連邦家族省について少し見えています。家族の負担調整の制度などで、国家がどこまで介入しているのかということが、ひとつの論点としてあります。もうひとつは、しつこいなと思われるかもしれませんが、カトリシズムと接続する他の思想として、オールド自由主義についてです。

これまでの研究の延長上で、少し異なるものとしては、カトリックの住宅政策と反対側の動きとして、エルンスト・マイ(Ernst May)というモダニズム建築家、都市計画家について調べています¹⁸。現在関心があるのは、マイも参加した、東ベルリンのフェンプフル(Fennpfuhl)で行われたモデル住宅団地のコンペです。結局、住宅団地は建設されなかったのですが、コンペは、東西両ドイツの建築家を集めて行われました。戦間期に一緒に働いていた建築家も多く、そこで共有されたものがまだ生きていたようです。1957年のことですが、東と西に完全に分かれてしまっているわけではなくて、どう進むかまだ未決定な部分が残っていたようで、面白いと思っています。

最後に、今までと異なった分野で新しく始めようとしているテーマが、ザールラントの帰属問題です。西ドイツ成立後もフランスの管理下にあったのが、1955年に住民投票をやって1957年に西ドイツに編入されるんですね。この問題は、これで独仏協力の障害が除去され、欧州統合が進んでいくという文脈で言及されることが多いと思いますが、それとは異なる視点で、帰属をめぐるどんな議論が国内でなされたのかを見たいと思っています。興味深いのは、アデナウアーは「ヨーロッパ化」といって、ザールラントをヨーロッパ共通の地域にしようとしたのですが、住民投票で否決されて、西ドイツ帰属が決まったことです。要するに首相の当初の意図に反して戻ってきたという、ちょっと変わった経緯のある領土なんです。

クリオ：ほんとですね。

芦部：西ドイツは、国際組織や超国家組織に埋め込まれることで主権を回復していきます。これを主導したのがアデナウアーで、東西ドイツの統一より西側諸国との結合を優先するという路線です。今では当たり前のように思われるかもしれませんが、この選択はそれほど自明ではないんですね。占領期から西ドイツ建国直後にかけて、色々な構想がありました。たとえば、統一を優先する、あるいは、領土を取り戻すっていうナショナルな枠組みを重視する流れがありました。ザールラント問題でも、「ヨーロッパ化」じゃなくてドイツ帰属という動きは、政権内からも野党からも出てきました。1950年代の

¹⁸ 関連するものとして、芦部彰「戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設」『ゲシヒテ』12号、2019年4月、71-87頁。

半ばから後半にかけての時期ですが、この時点でも、必ずしもひとつに収斂していない。先ほど言った、1950年代に残っていた未決定な部分にもつながる問題だと思っています。

それから、ドイツ帰属を求める場合、東西に分かれて、オーデル・ナイセ線の問題もある中で、どういう枠組みのドイツが念頭におかれていたのか、アデナウアーにしても、戻って来た領土をどう位置付けたのかということが重要な論点になると思います。他にも、戦後史では東の領土問題が重視されますが、その関連でいうと、オーデル・ナイセ以東から「追放」されてきた「被追放民」は、ザールラントの事例を目にして、どう反応をしたのだろうかという論点もあります。西と東の領土問題をリンクさせる、あるいは、同時に見るができるかもしれません。横の広がりだけでなく、時間軸でいえば、ザールラントは戦間期も国際管理下に置かれ、1935年に住民投票を行いました。その20年後にまた住民投票をやったわけですが、20年前の出来事は、どう考えられていたのかという問題もあります。今までの住宅という身近なところにフォーカスしたのとは違う、領土という話題ですが、この問題を通じて時代や社会の特徴に迫ることができたらと考えています。

岡本：院ゼミで扱った論文を受けての質問ですけれども、今年度（2019年度）のゼミでは、ドイツ帝国以前の、連邦制としてのドイツを再評価するという論文集¹⁹や、ウルリッヒ・ヘルベルト(Ulrich Herbert)の論文など²⁰を読みましたよね。

芦部：ええ。ハイ・モダニティ(high modernity)の。

岡本：あと、ハプスブルク帝国の解体に果たしたイタリアの役割の再評価²¹もありましたが、再評価や時代区分を見直す論文をゼミでいくつか扱いました。それを受けて、ドイツ史の中で何か見直しができる動きについて、先生が思うところをお聞きしたいと思います。

芦部：今挙げてくれた文献のうち、ヘルベルトのハイ・モダニティの論文は、世紀転換期の変化を重視しますよね。それ以降の時代の様々な動きを、世紀転換期の社会の激しい変化に対する応答、リアクションと解釈して、1880年代くらいから1970年代くらいまでをひとまとまりにして捉える見方です。それで1970年代に別の局面に移行する、ポスト工業的近代になるという話だったと思います。

今後見直されるかもしれない点としては、その時代区分とも関わってきますが、戦後史、1945年以降をひとつの時代として括るのは難しくなって、戦後史の中の時代区分が意識されていこうと思っています²²。今ちょうど2020年ですが、1945年から75年経っています。1945年から75年さかのぼると1870年ですよね。ビスマルクの統一が1871年ですから、そこから1945年までが74年、それより長い時間が1945年から現在まで経過している。ビスマルクの統一から色々なことがありましたが、戦後はその時間より

¹⁹ Dieter Langewiesche, Reich, Nation, Föderation. Deutschland und Europa, München 2008.

²⁰ Ulrich Herbert, Europe in High Modernity. Reflections on a Theory of the 20th Century, in: Journal of Modern European History 5-1(2007), pp. 5-21.

²¹ Marina Cattaruzza, Das Ende Österreich-Ungarns im Ersten Weltkrieg. Akteure, Öffentlichkeiten, Kontingenzen, in: Historische Zeitschrift 308-1(2019), S. 81-107.

²² 芦部彰「西ドイツ社会史研究の現在：「長い60年代」をめぐる研究を中心に」『歴史学研究』960号、2017年8月、15-22, 28頁。

も長い。長さや重要性、量と質は別のカテゴリなので、それは取り違えちゃいけないことですが、単純にそのくらい長い。それをひとまとまりとして見ていくのは難しくなっていくんじゃないかと思います。

別の形で言うと、(西ドイツの)初代首相のアデナウアーは1876年生まれで、1967年に91歳で亡くなりました。首相の在任期間は1949年から1963年で、西ドイツは73歳の老首相とともに歩みを始めた新国家という、妙なところがあります。アデナウアー時代は西ドイツのベースが作られる時期ですが、その前の時代との関連を無視できませんよね。アデナウアー一人で西ドイツをつくったわけではないので、イメージしやすい例としてですが、73歳で首相になる前にも色々あるわけです。それで、戦後史の時代区分といった時に、戦後の中だけでそれを分ける時代区分じゃなくて、1945年より前の時代との関わりを意識した形の時代区分ですね、それが議論されるようになるのではないかと思います。もちろん、1945年はかつて「ゼロ時(Stunde Null)」と言われていたのが、大戦末期から占領期への連続性とか、ナチ期との関係が検討されて、そういう見方がすでに相対化されています。今言っているのは、それだけじゃなくて、戦間期、第二帝政期からといった、もうちょっと長いタイムスパンを意識して、戦後に起きた事象や変化の意味を考えることが盛んになってくるのではないかということです。

この世紀転換期の高度工業化を意識しながら1970年代に画期を見るという枠組みですが、実際の研究で使えるかという問題もあると思います。自分の研究でいうと、社会カトリシズムというの、世紀転換期の変化、例えば工業化の高度化と大衆社会の登場に対する対応のひとつと言えらると思います。「レルム・ノヴァルム」という重要な教皇回勅が出るのが1891年のことです。そこから1957年の第二次住宅建設法まで、社会カトリシズムの理念の影響という点で連続性を見ることができないのではないかとことを書いたのですが、その後の時代まで見ると、社会の実態として、1960年代には、1950年代の構想や理念との乖離が生じます。まだ、1970年代までちゃんと見ることができていないのですが、こういった連続と変化を考えるうえで、この枠組みは実際に参考になると思っています。

別の例では、さきほどいったエルンスト・マイですね。マイは、世紀転換期の変化を受けて出てきた田園都市構想とモダニズム建築の二つを軸に住宅建設や都市計画を進めるのですが、これは戦間期から1950年代まで連続しているんです。それが1960年代を通じて変わって行って、1970年代になると別のフェーズに移行します。連続性はいつ終わるか、終わった後をどう見るかという見通しも問題になりますが、これに関しては、少し前に出たものですが、『ブームの後』²³と言う本で、1973年のオイルショックで経済の拡大局面が終わり、別の局面へ移行する、そして、現在につながる問題が登場してくるということが論じられています。

村田：その時代区分に関してですが、今後、再統一時代が歴史化されると、ドイツもそうですし、ロシアや東欧でも社会主義体制の崩壊に関して起こりそうなことではあります。再統一は時代区分の指標としてどうなっていくのでしょうか。

²³ Anselm Doering-Manteuffel / Lutz Raphael, Nach dem Boom. Perspektiven auf die Zeitgeschichte seit 1970, 3. erg. Aufl., Tübingen 2012.

芦部:先ほども言いましたが、再統一から30年ということで史料の公開が進み、実証研究がたくさん出てくると思います。たしかに、それがひと通り出た後に、もう一度落ち着いて見直してみましようということになるかもしれませんね。

例えば、時代区分としての再統一を相対化するという点では、西ドイツの主権回復のプロセスも再統一のプロセスも、どちらも欧州に組み込まれるという点が共通しているように見えます。ですが、その後バランスが変わったタイミングがあったと思うんです。ドイツに枷をはめるところから、より積極的な役割を求める議論へと、期待されるものが変わったところで区切るのもあり得るかもしれませんね。

クリオ:最後に、過去のインタビューでもお聞きしてきたのですが、「歴史研究のために大切な能力は何か」と「なぜ人は歴史を学ぶのか」ということについて、芦部先生のお考えをお聞かせいただけたらと思います。

芦部:そうですね。大切なこととして、能力なのかどうかわかりませんが、やはり愚直であるということでしょうか。要領がいいのが悪いのではありませんが、結局史料を見つけるにも、時間をかけないといけないです。これはどうしようもないですよ。それから、史料を探すということだけでなく、色々と時間をかける過程でわかってくるものがあると思います。

それから、そこに生きていた人たちに即して考えるということも大事なんじゃないでしょうか。同時代の人間に何が見えていて、何が見えていなかったのかということ抜きに、この人たちは愚かだとかどうだと言っちゃまずいですよね。これと関係するかもしれませんが、視点のとり方でしょうか。色々なアプローチがありますが、どれにも長所と短所があります。自分の視点によって、何が見えやすくなるのか、逆に何が見えなくなって落ちてしまうのか、それを意識することも大事なように思います。

あともうひとつが...

クリオ:なぜ人は歴史を学ぶのかということですか。

芦部:そうですね、難しい問いですが、自明性を相対化するというか、当たり前のこととして見えていたものが必ずしもそうでなくなるということじゃないでしょうか。過去を見ていくと、その時代その時代で、そこで生きていた人は懸命に試行錯誤していたわけですよ。色々な可能性があったけれども、そのうちのひとつが結果として現実になり、そういうことがいくつも重なって、今に至っている。過去のそうした積み重ねの上に現在があって、自分自身もそこにいると知ることじゃないでしょうか。

最初に社会学の話が出ましたが、大学に入ってすぐに受けた基礎演習の先生が見田宗介という社会学の先生で、その後社会学に1年いた間に講義を聴いたことのある先生に船津衛という先生がいました²⁴。どちらの先生がおっしゃっていたのか覚えていないのですが、先に個人があって関係を結ぶのではなくて、関係が先にある、その関係によ

²⁴ 見田宗介『宮沢賢治：存在の祭りの中へ』岩波書店（同時代ライブラリー）、1991年；真木悠介〔見田宗介のペンネーム〕『時間の比較社会学』岩波書店（同時代ライブラリー）、1997年；船津衛編『G.H.ミードの世界』恒星社厚生閣、1997年。最近の入門書では、船津衛『自分とは何か：「自我の社会学」入門』恒星社厚生閣、2011年；見田宗介『現代社会の理論：情報化・消費化社会の現在と未来』岩波書店（岩波新書）、1996年。

って析出されるのが個人だと。あるいは、人間は他者の声によって構成されているのだという話もあったように思います。まるで玉葱みたいに、これは私じゃない他人の声だ、これは私じゃないと言って皮をめくっていくと何も残らない。私ではないと捨てていった、その皮が私だ、みたいな話でした。ここから先は勝手な解釈ですが、自分はいつか耳にした他者の声によって構成されている。それは直接聞いた声かもしれないし、必ずしも直接でない可能性もありますよね。色々なものを介して入ってきた他者かもしれない。その他者もまた、別の他者によって構成されている、その連鎖をずっと考えていったら、横にも縦にも広げることができますよね、社会的にも歴史的にも。ひとつ、そういう考え方もできるかもしれない。そういう意味では、歴史を学ぶ、振り返るのは、なんと言ったらいいのか、人のありようにとってかなり本質的なことなんじゃないかと、そう思っています。

クリオ：ありがとうございました。

参加者一覧（肩書は当時）

聞き手・編集：松本 祐生子（D2・現代ロシア史）

協力：八谷 舞（助教・近代アイルランド史）

内川 勇海（RA・古代ギリシア史）

長島 滯（D2・近現代フランス史）

村田 優樹（D2・近現代ウクライナ史）

小川 潤（D1・古代ローマ史）

山口 陽子（M2・近現代フランス史）

岡本 勇貴（M1・現代ドイツ史）